=市史編さん便り=　【19 号】　令和５年７月４日(火)発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

―土佐清水市内・小中高等学校校長研修会講話（市史普及啓発活動）―

「少年中浜万次郎を育んだ中浜浦・土佐清水市史の視点から」

７月３日(月)15 時から１時間にわたり、土佐清水市教育センター・会議室にて、標記研修会で中浜万次郎に関わる講話を実施した。

◇受講者は以下のとおり…
清水高等学校長･田中修一氏
清水中学校長･斧川哲也氏
清水小学校長･佐竹正史氏
下川口小学校長･永野美華子氏
三崎小学校長･藤倉千秋氏
足摺岬小学校長･平林也奈氏
下ノ加江小学校長･東　淳一氏
教育の魅力化推進コーディネーター
岡村相良氏
土佐清水市教育センター
スクールソーシャルワーカー
文野貴之氏

※万次郎の少年時代と中浜浦が中心となる講話であったため、幕末の激動期に万次郎がどのように活躍したかを聴きたかったとの声があった。
万次郎は、明治４年(1871)ヨーロッパ出張から帰国した44歳の時、脳梗塞を発症する。以降、歴史の表舞台から姿を消す。このあたりのことも含めて改めて講話の機会をいただきたいと思う。

講話の概要は以下(1)～(8)のとおり…

(1)「過疎化、超高齢化」が加速する中で急がれる「**地域学の確立**」「**渭南学(以南学)**」。
今回の「市史編さん事業」は、これら地域学の確立に大きく貢献するものである。

(2)「市史普及啓発活動」の一環として沖縄・豊見城へ
沖縄ジョン万次郎会(会長赤嶺光秀氏)の招聘で講話(6/4)を行うため 6/3～6/5「2 泊 3 日の沖縄への旅」へ出発したエピソード。
「嘉永四年(1851)旧暦１月３日に万次郎等３人の沖縄上陸ときの伝聞」「そのとき万次郎が辿った約 12 キロの道」「高安家での半年間の沖縄滞在」等のエピソード。

(3)琉球と土佐清水の不思議な縁
黒潮に流された琉球船土佐への４度の漂着(『土佐國群書類従』から)

①寛永 17 年(1640)土佐佐賀漂着
②宝永 2 年(1705)土佐清水湊漂着※
③宝暦 12 年(1762)柏島漂着、大島(宿毛市)へ曳航
④寛政 7 年(1795)下田(四万十市)漂着
※②についての詳細
宝永 2 年 6/23 福州(清国福建省)の港を出港(琉球へ帰国)
7/10 オランダ船に追跡され、黒潮に乗り土佐清水湊へ漂着
7/10～11/18 土佐清水へ滞在　奥間ペーチン以下 82 名が遭難
11/18 薩摩藩が迎えに来て、薩摩まで移送。
11/18～2 月中旬薩摩山川へ滞在
2 月下旬に琉球へ帰国　土佐清水漂着から実に 8 ヶ月余り

(4)紀州印南浦海民の足摺半島浦々を基地(据浦)として旅漁進出
・17 世紀中頃から足摺半島浦々を基地に紀州印南浦海民がカツオ漁を展開。
・その後、地元海民の国外への海上逃亡（いわゆる「走り者」の増加）

(5)山城屋の全盛と近世末中浜浦の様相
・資本主義経済体制が地域に浸透。中浜浦は山城屋の工場敷地として機能。
・山城屋を頂点に本家当主、分家当主、浦方顔役、船頭、医者から船子、納屋番師、バラ抜き、奴、子守りまでヒエラルヒーが分化。
・10 歳くらいから少年は、本家分家や浦方顔役等の富裕な屋敷で雑役を行う「奴」になった。同じく少女は、子守り奉公した。給金は貰えないが三度の食事を与えられた。これが貧しい家庭の口減らしとなった。

(6)足摺岬沖合漁場とその自然環境
・足摺半島南西部「臼碆」に黒潮が接岸する（現在は離岸)。足摺岬沖合でこの黒潮と土佐湾岸反転流がぶつかり、四万十川や仁淀川から注がれたプランクトンが舞う。これに小魚が群がり、食物連鎖でこれを喰うためにカツオがなぶらする。これが足摺沖合漁場の好漁場である理由である。

(7)『中浜東一郎日記』「明治八年土佐紀行」から
・明治八年（1875）7/26～8/5　11 日間
鉄道と郵便船、石炭船、漁船をチャーター、乗り継ぎ
・親類との交流、祭り見物、海川での遊び、釣り等々
・万次郎の中浜への帰省
①嘉永五年(1852)　母と 11 年ぶりの再会、万次郎 25 歳（母 59 歳)。
②安政四年(1857)　母を訪問、中浜帰省、万次郎 30 歳（母 64 歳)。
③慶応二年(1860)　母を訪問、中浜帰省、万次郎 39 歳（母 73 歳)。
④明治六年(1873)　母を訪問、中浜帰省、万次郎 46 歳（母 80 歳)。
⑤明治八年(1875)　母を訪問、中浜帰省、万次郎 48 歳（母 82 歳)。
※明治 12 年(1884) 母「志ヲ」コレラで病死(行年 86 歳)、万次郎 52 歳。
・万次郎の臨終の場面
※明治 31 年(1898)11 月 12 日「その日は突然に…」
(8)まとめ